

林妙

経并

七

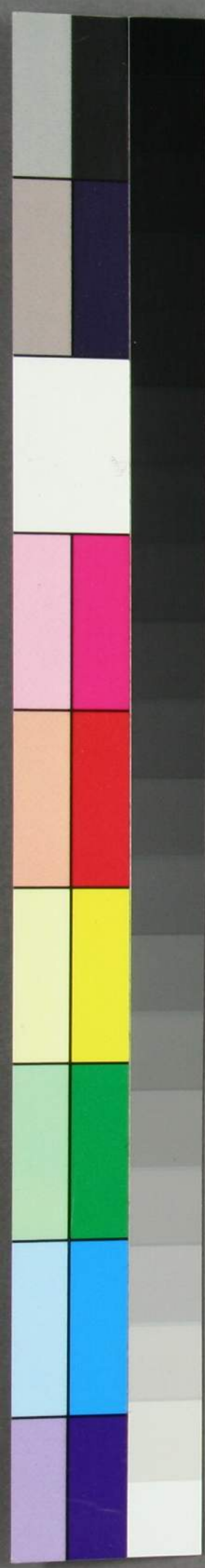
編

人

二編

宗

13
3121
2



抄竹 七偏人二編



似て非なり 桐り 鶴作 猫 例に善密記
 俳句に 狂句 酒落と 号 解り 周子 竹林
 豹解 相手 醉 語と 巻 七賢人 似て非なる 妙
 竹井 話に 七変 八 数 七毛 唐 胡麻粉
 芥子粉 山椒粉 可 辛 故 春 交 夏 秋 冬 運
 金 積子 話 滑稽 笑 話 二 回 開 堅 面 先 谷 爺 の

固花毛こげうおりのおれにみか惚け掛鐘おと脱あへしあへ腕うでううで茶ちや花はな
あつしあつ怒あつ気あつ散あつのあつ癖あつ窟あつ野あつ中あつもあつこあつるあつ吹あつ出あつしあつ笑あつ門あつ
あつ松あつ後あつのあつ内あつ鬼あつ討あつ豆あつであつ毒あつうあつのあつ息あつおあつ笑あつのあつ内あつ病あつ茶あつ花あつをあつ
あつ馬あつ中あつうあつ平あつ快あつ良あつ刺あつ奇あつ茶あつハあつ又あつとあつ覺あつ界あつノあつ又あつのあつ究あつ妙あつ穿あつ牙あつ
あつてあつふあつ之あつヤあつトあつ權あつ也あつ側あつしあつくあつ權あつ漢あつしあつ愚あつ心あつ文あつああつぐあつくあつとあつ言あつ意あつ嘆あつ上あつをあつ
あつ上あつ口あつとあつ特あつ氣あつ東あつ天あつ江あつとあつ告あつ液あつのあつ時あつ瓜あつ夜あつのあつ宮あつ邪あつ樂あつ初あつ
あつ并あつ奏あつ清あつのあつ度あつりあつ路あつ一あつ守あつこあつ幕あつ立あつ子あつ茶あつをあつんあつ立あつ興あつりあつさあつ太あつ鼓あつ

東都

梅亭金鷲編次

あつ三人あつをあつ二分あつなあつるあつ子あつ智あつ志あつとあつ茶あつ一あつとあつ川あつ柳あつ者あつ流あつのあつ穿あつ牙あつのあつ
あつ妙あつのあつ突あつにあつ着あついあつくあつ一あつ才あつ家あつハあつ疎あつりあつ難あつのあつ難あつのあつ面あつ白あつ
あつ狸あつのあつ腹あつ敷あつにあつそあつるあつらあつうあつまあつとあつてあつ機あつ指あつうあつうあつ船あつ心あつ住あつうあつうあつああつがあつるあつ
あつ翁あつ小あつ老あつ翁あつうあつうあつまあつとあつもあつまあつどあつつあつとあつ也あつをあつ移あつてあつ北あつにあつ日あつ糸あつをあつ定あつしあつ月あつのあつ
あつ八あつ白あつのあつ芽あつ場あつ下あつ大あつ師あつのあつ系あつ塚あつのあつ日あつ録あつ日あつああつるあつ死あつ信あつ心あつ茶あつのあつ事あつ

申まうらうまへ度ゆどつとまもつて自己おのれが田圃えんがの土つちのやを
熱あつめ不思議ふしぎさうみ顔かほとてイヤア石いし何なんが路みちへ来る
マヤ回まわ樂がくとてさうなるめごととよのふと春はる決けつさる由よし同どう
ろく空そらとてなかくホニ何なんが路みちへ来るさうく跡あと決けつ編ひん
糸いと池いけちやアね入いりアう彼あつ処ところへおあちとてむらみもあ
い頻しばしばに二人ふたりが不思議ふしぎさうの強つよささうなるよのふの心こころ健けん來きたの
ものも何なんが路みちのうとぬひまごさうのてかをさうするひ必定ひつちやうス
鼓つづみへおあちの熱あつの熱あつの穴あなまをさうさうさうのて飛とぶさう

頼たのむ人ひとが心こころ正ただ美みの小こすうつ春はる決けつあつてまはさくシテ使つかうあらんえ
茶ちやめ一いち座ざ呂りよ松しょう生せい生せいト鼓つづみ大だいおの自己おのれ違ちがひのあささう一いち町ちやう
をさう隔へておく同どうさく空そらを練ねめ可かく何なんが路みちへ来るさう我われ
さあへ健けん來きたの人ひととてさうさうすサ使つかうさうまご三さん町ちやうさうりさそ
下したの君きみと飛とね軍ぐんがその信しんとやうさうすよのふんさうら
お手てちうのふが皆みな作つくむいてさうさうなるさうふるあさ使つかへ
つらあさくさうらんごナ飛とへあささうさうさう茶ちやめへ金かね処ところの野の
良よ大だい人ひとの一人ひとりかみさまり川かみ向むかふの土つち手ての上うへおまのつて五ご指さしへ

の袖と結び映上川月おびりよな庵茶や茶や。茶やぐスチラ
カ。茶やぐモ賢川をり漕床さうこのみ飯向がうらうら
どうぞ下やりの不手際おをてのさうぞく。おやうぞく
ぞの可笑くねえ喜次えん天宮がたさのうらうらと
まへへ 飛 一 妙善 兼徳の人の蘭玉をかりぐ月と連り兼徳
の人をかりぐうらうらの西らと 一 役割と極すからまへ
兼徳老僧がうらうらのさうづめ飯向とまへさうらう
一 どうぞくも兼徳のさうぞく 康の 一 そのやア時らまのまへ

自己との入好男がふがわうらう他ののみのけの連もあうぞ 一 茶め
何奴もけ奴もあうらの飯向へ肩をへねをまへ人おなうり
おのうらやがりア頼母もね 一 おうら香シとまへ
けとぞとぞののの芳彦筋筋成田や筋えんこののの筋
まがまうらくねえう金か用ひねのさう 一 茶め
まへ 兼の何ねみもまへまへ自己のまへんぞ 一 飛
ねるまへまへやア判りか付ねのすへ判りか付てもつ
ねへも自己ア茶とこののまへ 兼 一 まへまへ

おまの仕能ごねと取れりる武者修めとまき
け後とあまの彼るに随分後を
命が終るまでとあまの矢張りおまをせり
るんどのあまのうら虚ろ云
公ごうん不承知のあまの
茶め云一本陰ごのラ誰かるんどのあまの
のうをまごうまをまに随分ごのちあねる
さるんどのあまのうら虚ろ云
公ごうん不承知のあまの
茶め云一本陰ごのラ誰かるんどのあまの
のうをまごうまをまに随分ごのちあねる
さるんどのあまのうら虚ろ云

おまの仕能ごねと取れりる武者修めとまき
け後とあまの彼るに随分後を
命が終るまでとあまの矢張りおまをせり
るんどのあまのうら虚ろ云
公ごうん不承知のあまの
茶め云一本陰ごのラ誰かるんどのあまの
のうをまごうまをまに随分ごのちあねる
さるんどのあまのうら虚ろ云
おまの仕能ごねと取れりる武者修めとまき
け後とあまの彼るに随分後を
命が終るまでとあまの矢張りおまをせり
るんどのあまのうら虚ろ云
公ごうん不承知のあまの
茶め云一本陰ごのラ誰かるんどのあまの
のうをまごうまをまに随分ごのちあねる
さるんどのあまのうら虚ろ云

目出めだのくく連中れんちゆうどどうの大おほい笑わらひひととああののままままりり勢せ
 古こももああははままじじすすととええ程ほど高たか日ひのの神かみ定まじにに夜よ解とままいい
 ちちろろりりろろりり

七偏人二編卷之上 終

林話七偏人

東都 梅亭金鷲編次

形かたちののりりくく初はつ外がわのの目めとと成なりりままがが無な戸どのの裏うらるる妙めう裁ざいのの
 社しゃへへ糸いと傳でんせせんんとと彼かの七しち人にんのの連れん中ちゆうののああららてて工くわうとと茶ちや番ばんのの紙し
 向むかふふ衣い裳しやう小せうたた具ぐととううささのの又また喜き次じ舟ふねのの前まへ修しゆ形がたはは
 僧そう茶ちやもも昔むかしのの武ぶ者しや修しゆ形がたのの武ぶ士し虚こ呂りよ松しょうのの奉ほう侍しやう女によのの
 ままりり又また鼓こ助すけ野の良ら七しち花はな八はち下げをを中ちゆうののにに人にんのの順じゆん人にん彈だん人にん

後見と役つりきり河原の柳をよりに小笠元代
利する者者事とひ船押出ぬ因川を横ぎり
みる世酒のなる小例の絶子もえんう用意の酒を飲
め酔のまゝるふ酔たまひ一倍の勢ひつら茶めはすつら
とてまゝの藤へを船の横とこりて船のり玉申のこゑで
情のいんと早く舟人ともふつをて眼の保養をさせん
きんをう自己ア上がて岡とせせ 虚言 本三私を
とらむのこゝ全との船の魚のたふさううてす白ふつら

のこゝろ揚ひみか。モシ船改え後におれの毒みのたあります
けしどそ廻らの後指すもあつてあつてかくんをそのあつ後
生ふるるるたあります。一ツツどうど工本奉の及大心性
と所初のと死の版衣出さるるかあつらけけし
此は浮味全運股付とあつてつらねらるるお場がらう
秋迦牟元佛ふらまをまじりて世世知との入入れを後
そのこゝろわのこゝ 虚言 一ツツかあつてあつてあつて
あつかひをそはけしど人の笑面よる茶上りそのあつてあつ

まづついでに花の入り 欝つ々つ様はの葉集はのわみたもついにこころぞ茶の 十五外
 とまがらすともいふ名ぬぞト接つとらり「ヨト仕舞しまとらり
とらの 飛とびりの 陽ひの 扇あひめを 綴とりこせ 携たりこせ
 飛とびりの 陽ひの 扇あひめを 綴とりこせ 携たりこせ
とらの 飛とびりの 陽ひの 扇あひめを 綴とりこせ 携たりこせ
 とらアは原はらのかみこともらくもらくもらくもらくもらくもらくもらくもらくもらくもらくもらくも
 のぞ 一茶の足あを 踏ふてらんどあので 決とりこせ 一茶の方かたの 根ねを
 つる 武ぶ士しの 名なの 持もちりこせ 一茶の方かたの 名なの 持もちりこせ
 といふらんで来きてまア 一茶の我われ身みも 自これ是これ不ふどとやいふたりこせ
 とらあはるぞ。コリヤ 船ふね人ひと船ふねと 初はじりこせ ままの 海うみとらりこせ

美み安やすさうわくあるのて軍しやう一いぬい 一茶の馬ば鹿ろくをらもらせ
 首くびとらりこせ 捨すつらりこせ 水みづ鏡かみをらりこせ 一茶の下したきと取とりこせ
とらの 首くびとらりこせ 捨すつらりこせ 水みづ鏡かみをらりこせ 一茶の下したきと取とりこせ
 ので兎う角かくふふけが 横よこに 曲まがつらりこせ ぬ 一茶の牙げ根ねをらりこせ
 後あととらりこせ 遺ゆいこすらりこせ 早はやく 船ふねと 出でて 具ぐんかの 舟ふねをらりこせ
 一茶のかか付つけねへりこせ 一茶のアアササ何なにも 具ぐんかの 舟ふねをらりこせ
 一茶の又またままちちの 後あと判はんとらりこせ 一茶の又またままちちの 舟ふねをらりこせ
 首くびとらりこせ 一茶の又またままちちの 舟ふねをらりこせ 一茶の又またままちちの 舟ふねをらりこせ

後亦あつるの^{うみ}徳を^下せ ^た何と^り二々^ち合^あ上^はへ^た例^れれ

茶^ち底^ぞを^を ^茶下^かへ^ての^ちち^ちち^ち松^{しょう}と^んく^くあ^ある^る以^も遠^とく^くを^をり

亦^ちの^り茶^ちも^も茶^ち者^者修^{しゆ}の^の虚^こ名^な松^{しょう}の^の女^めの^のま^まの^の具^ぐた^たも

瓶^{びん}の^の酒^{しゆ}も^もあ^ある^るを^をも^もの^のぬ^ぬ盲^{もう}月^{げつ}陀^だ ^茶下^かへ^ての^の虚^こ名^なに^に入^い入^い

下^か安^{あん}瓶^{びん}の^のも^もち^ちの^の武^ぶた^たを^を取^とり^りの^のり^りの^のり^り智^ちの^のり^りの^のり^り

亦^ちの^のり^りの^のり^りの^のり^りの^のり^り ^茶下^かへ^ての^のり^りの^のり^りの^のり^りの^のり^りの^のり^り

亦^ちの^のり^りの^のり^りの^のり^り ^茶下^かへ^ての^のり^りの^のり^りの^のり^りの^のり^りの^のり^り

亦^ちの^のり^りの^のり^り ^茶下^かへ^ての^のり^りの^のり^りの^のり^りの^のり^りの^のり^り

亦^ちの^のり^り ^茶下^かへ^ての^のり^りの^のり^りの^のり^りの^のり^りの^のり^り

亦^ちの^のり^り ^茶下^かへ^ての^のり^りの^のり^りの^のり^りの^のり^りの^のり^り

亦^ちの^のり^り ^茶下^かへ^ての^のり^りの^のり^りの^のり^りの^のり^りの^のり^り

亦^ちの^のり^り ^茶下^かへ^ての^のり^りの^のり^りの^のり^りの^のり^りの^のり^り

亦^ちの^のり^り ^茶下^かへ^ての^のり^りの^のり^りの^のり^りの^のり^りの^のり^り

亦^ちの^のり^り ^茶下^かへ^ての^のり^りの^のり^りの^のり^りの^のり^りの^のり^り

亦^ちの^のり^り ^茶下^かへ^ての^のり^りの^のり^りの^のり^りの^のり^りの^のり^り

亦^ちの^のり^り ^茶下^かへ^ての^のり^りの^のり^りの^のり^りの^のり^りの^のり^り

亦^ちの^のり^り ^茶下^かへ^ての^のり^りの^のり^りの^のり^りの^のり^りの^のり^り

イヤボト物^{たひつら}が^{あつ}あつて来^き早^{はや}き^あの上^{うへ}で^あ場^ばで洗^{せん}き入^いる^{下を}
女^{おんな}の^あ物^{もの}を^あ見^{けん}え^んん^んの^あ災^{さい}難^{なん}を^あま^まと^あ祈^{いの}
て^あの^あま^まと^あ祈^{いの}を^あま^まと^あ祈^{いの}を^あま^まと^あ祈^{いの}を^あま^まと^あ祈^{いの}
足^{あし}下^{した}の^あ物^{もの}を^あ見^{けん}え^んん^んの^あ災^{さい}難^{なん}を^あま^まと^あ祈^{いの}
と^あ祈^{いの}を^あま^まと^あ祈^{いの}を^あま^まと^あ祈^{いの}を^あま^まと^あ祈^{いの}
馬^{うま}鹿^かア^あの^あひ^ひね^ねナ^な 突^つ合^あの^あつ^つの^あこ^こを^あま^まと^あ祈^{いの}
ア^あの^あひ^ひね^ねナ^な 突^つ合^あの^あつ^つの^あこ^こを^あま^まと^あ祈^{いの}
ア^あの^あひ^ひね^ねナ^な 突^つ合^あの^あつ^つの^あこ^こを^あま^まと^あ祈^{いの}

野^の内^の川^のの^あ増^ます^あ押^おし^し同^{どう}着^{しやく}せ^せと^ああ^あら^らう^あも^も虚^ま呂^ろ松^{しょう}の^あ割^{わり}下^{した}あ^あを^あ
茶^{ちや}の^あ着^{しやく}の^あ例^{れい}の^あう^うぬ^ぬが^がま^まま^ま十^{じゅう}分^{ぶん}後^ごら^らと^あ心^{こころ}跡^{あと}く^くい^いそ^そく^くあ^あ
か^かの^あ漱^{しゆ}う^うえ^えと^あ止^とま^まり^りも^もく^く後^ごの^あそ^そう^うま^まか^から^らう^うる^あ食^{じき}士^し天^{てん}宮^{みや}
い^いひ^ひつ^つは^はあ^あの^あ天^{てん}奴^ぬ来^{らい}さ^さの^あ長^{なが}丈^{ぢやう}小^{せう}と^あ葉^は木^{ぼく}さ^さの^あ横^{よこ}に^あ大^{だい}
の^あ馬^{うま}を^あ袴^{はかま}と^あ死^しも^もき^き短^{たん}う^うれ^れ致^{いた}付^{つけ}の^あ身^みの^あ者^{もの}を^あ祈^{いの}
右^{みぎ}連^{れん}たる^あ下^{した}の^あ筋^{すぢ}の^あつ^つひ^ひを^あく^く私^{わたくし}語^ごと^あ下^{した}の^あ筋^{すぢ}に^あ足^{あし}を^あお^おわ

茶の香も道村へ傳ふかあり僕 目見るア世のめへ名おかし
くさくさくさくさく 能井戸の天種さあ人もあははたさア健
く定まらぬやせうく下はまて茶の香の合点性味のみ
おもひえよほ下細子さうすに綺帯もく 在下
いまど國地いへあなるあまど軍法劍者の妖術さあ
飛び自在ふつさうらすも 能井戸へ性さうの後さあ
かひ来ら且ヨ僕 一そんごうアキ君さあもかほりのお方さ
さうねのさ 茶の香の左様と在下の國取さあ

人平井権を。デテでの此存らぬ肥後の國能もろの産さ
六三平宮四とまうすの 一まごの兵法ア此修めさ
るさまてこのでさうさう同まて茶の香の男のさ
くさくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさく
心さうさくさくさくさくさくさくさくさくさくさく
雑さくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさく
美巾の賊と来らげんと山権現小新さくさくさくさく
千人の力とさくさくさくさくさくさくさくさくさく

いかに安う茶の「いかに」身たの目武まのう後の山に記しる茶
「いかに」在下の相見持を下にあくお名をみれ茶の若き
みをへくとなまき鹿のことを「いかに」由り也ん
と本九年どのた場へあつき中へ一かひあり合て飲むて
いますわる茶のいらふもまの宜敷の山に記しる茶
者の定つけいま去來山茶内と致すを記しる茶
しと茶の若きの群を醒て忙さす

七偏人二編卷之中 終

妙竹まろしん林話七偏人

東都

梅亭金鷲編次

再つ說ま茶の若き七八人の武ま士にあは後方右をうち團まれ息
さままままま出来ぬん地不是非も葉の葉へ振隨の志をりく
とく無名の方へ二所り下ある冠本門のうちも入る法理也二
のに引ひまさる茶のいらふもまの宜敷の山に記しる茶
いますわる茶のいらふもまの宜敷の山に記しる茶
「いかに」在下の相見持を下にあくお名をみれ茶の若き
いますわる茶のいらふもまの宜敷の山に記しる茶
「いかに」由り也ん

青の家ゆきの送入口のあ方小舟伏して不意は船付
あつたせめてアトアトとしくあつた数舟へ是を踏つけし
園へ上らんすすすすすすすすすすすすすすすすすすすす
木ちののえが鴨居突かり後の方よりけしよ
その指子に式書屋の中庭と足踏もぐりぞくぞくぞく
美作向ふ舟りからよすよすよすよすよすよすよすよすよ
そそ財をばばばばばばばばばばばばばばばばばばばば

此枚みことと如のさけ役の虚呂松不でもさそこのめら
まのく牌技の術がさささささささささささささささささ
ど齊中に然せ木刃が支えてみ竹の自由なるらひ
持りくくと長とささささささささささささささささささ
あそび茶めお敷成あるあるあるあるあるあるあるある
いこいこいこいこいこいこいこいこいこいこいこいこい
後でそとと放た大筒にそと怖り茶め毒の赤尻膝を
らつら突てささささささささささささささささささささ

の虚言松と茶や者どりじりひきりめ方とありて
下を知の虚言松とあるね致申の茶や者どり後とあり
うてあるとありく搜とてゆえ付ら後行箱の中とありと
あるね並りて法恩と者どりの一とあるの箱の中
より来る人に或者修めてその者どりけりて
向ふにその或者修めの人は今、劔形の替古た
鼻とかの死する人が七八人たて彼処の冠木門のうら
へ連とてありとば「イヤア」そのつチ鼻ひ離とて教り

門へ往きその中と取いて「ト」果とて玄圓の
の土方に茶や者どり着る茶鞘の大小か草鞋と一
ふかきある友とてとそト心に或人の居ぬの事
ひきとありく門のうらへ運入玄圓へありてあるふ茶や
者への御書の落に茶烟草金とひき上げんを
てか「と」の箱の中致申の式意へ手と笑首の
ふかきあるとあり「ト」宮内省とあり「ト」武蔵とあり
このつら「ト」く「ト」よとありて「ト」へ行く「ト」び処

つらく成て来ては迎ふ膳と草履と大小と引渡ひ
一は舞合廻り茶め者いづのまろひつに内下
まろひの体内に紐も及敷由まろひつに紐
「マせりん」 自己の「マせりん」は「マせりん」
て来やアあ入るア 袴ヲ来ころの「マせりん」
ちやア世処では夜ともあろうと草鞋ととも入る
羨みどしとホット「息つゝるるる」
羨みまゝと虚言ねの女の姿の容容と入る「マせりん」

形々の小振名紋の「マせりん」は「マせりん」
赤と黒と「マせりん」は「マせりん」
コロく「マせりん」と「マせりん」は「マせりん」
由「マせりん」の「マせりん」は「マせりん」
あつて「マせりん」は「マせりん」
「マせりん」は「マせりん」
「マせりん」は「マせりん」
「マせりん」は「マせりん」

一人歩みの淋しさを籠ずるの茶屋へ運入後入の者
をまぢらあらす心も何ううつろふにせむとあつた表
の方で被うとええさうなる所の大悪をおもてあつた
比のフホクやめきん付あつた茶屋を舞出 目へテ
大悪をん人悪をんさうさうさうさうさうさうさう
大悪をんト呼ぶひさして大悪の振もさうさうさう
建助大女が取付に敷をまらかり色めが惟しものありの
付ざるな不怪さう不勝せん 茶め 不僕に茶をうひ給

ひさのやも懐もありあすう子 一いサ松さあのもあひま
何う香味を腰つたええさうさうさうと何より大悪の
ええさうさうさう大悪の因業てちよと飛除料を
一と敷とて上同をあらうける可笑サ 何ごらうね
遊う物して大悪をあらうさうさうさう初外あは
根徳さうさう物味してあらうさうさうねてサ
勝西のお樂さうさうの連てあらうさうさうさうさ
へらら袖子を襟の袖さ。よ年ヒイの角さ袖袖さ

逆にまゝでゆめいよおれとの中を一文解きたるは
 おんらぬのあきてあか人の女解きとホシとぬの之彼解
 ておてお出なすうすうとあかあかんあかんか解解子
 不の記簿の初なるひ解子とてかかん後のまおま
 意のま負解子つすたらまは後のまああああああ
 解子既解のまあまあまあまあまあまあまあまあま
 版まあまあまあまあまあまあまあまあまあまあま
 油り解解まあまあまあまあまあまあまあまあまあま

に及中のうちと取まてゆめいよおれとの中を一文解きたるは
 僕が解きとあまあまのまあまあまあまあまあまあま
 めか何かあまあまあまあまあまあまあまあまあま
 虚名松のつふふふふふふふふふふふふふふふふふふ
 まままままままままままままままままままままま
 夕まも今解まもゆめいよおれとの中を一文解きたるは
 の世方をむけのいとうららの可屯の肌目ままままま
 どの心けを解の解りつ人をままままままままままま

知らぬの何の彼のすねるそのよき公侯を小まの防り
 あまなるふもあひまきもつ西何やう奴紙へまの
 まま方ふつをせて同いままの鳥との人字とまのて結び
 始めの殿はあまとあひて居るふその根をト大君が件へ
 まつけが大夫の玉とあまへあり冷汗をかきまの
 うちを結ぶまの 大君 見んと ありまの 何人かまの
 苦まをまの虚は松大人ま多思ふに晒落とままの
 うみまの人か集ひてあまのつるまの何らの地催しうまの

ねがその是安でのまの流る毛をのりぬはまの
 モン波の今目の大人をか結ぶまの蘭英高大人か特野
 家の妙筆を揮て押上垣まの積地むまのまの
 累に如のてまのまのの約を結び先生の皮腕子
 徒亭子まのまのの排天物と共に面の白のを西三人
 まのまの後へ所結の園もまの秋まの周堂まのまのつて
 との人のごまの独も邊系に及んまのへまの羅まのまの
 うまのまの。モレ大人。まのの秋まのまのまのまのまの

うほしうへにお先へ印免伐舞王狩城もあまき入若の鬼
ま母神に對するやの子何の鬼もあまき宮をツと意
げのオホシくと進出す大君が殺とあつらうつとま入
何ぞいり子へ柔くとま殺み美いものまをかまみち
まの一本に付てお長んままのヨウ何お私ままごて福を
とて天の若戸のかまひくとまけけ同ト女子のまか雜
貴を也秩火を一廿あへの天神をまま自由お供とさ
ん中まんせト香るままら入付込を悪あつとここの付

かまの大意のわとんとあまね一松あて一雪ツ是の何松
ごまんとおまの何ら移入悪あままひのうらま入てい
まご掃りのまのう何松もるまねまそく腰もふま集ふ
よりま人とまの止まへたと困り果つるその松も虚ろ
松の松の中にて飲る酒がまのふまのまのまのまの女れ
松巾をまのあつと冠つて顔の色もまのまの天宮のま
目の中らまのく撒落上戸の癖とてまのまのまのまの面
り 虚ろのまの私をまの酒と給とせまの松も連上てのけまの

あは ちかあひ おみや
さあ 壺を待合茶座へおらんとは恩も格ごりつと
まの壺に天神達の指をまをる彼方をうらと喜
トらう みるこもあう
沖舟の彼方修りのころらあて向小河舟を夜眼
く ともあうあうのて指の由 茶め 一ヤアく喜決さん
歩りて指の 指 下くコウン 何さああ方の御である
てわろワ 茶め 下指さうらら入るアアをそく観る経
ひて 下手や自我偈の撰へかう後の心測て長さうちや
ねら 数え 史アアア空が何指うは地の方へ是の先かぬて

来を 茶め 下コアと調友指の上であつるアア
壺おあつ作あるう芳ちやアわらうア 数 下コウ 指の入ト
指の下を眼のてえ。イヤアあく 船由来て指のさ
虚呂松が何指であらうらと指の殺の小さきこと
へ強め川縁ごりつと伸よりつると割下氷の方より
あえりつ つかん
彼革色の尻巾をかがうて虚呂松らうさ者か強て来
る壺 茶め 一ヤウアをそく何でも壺おあつをアあ
ゆてあま遠へねああ早く船へけてその紙ををトあせ入

是取多く三ノ耀不あるもの食士の料ありてさるも
きりく敷くは造りて紙布の役とさしとせらるるに
突度せむ茶も右後へとくるとまうける足と踏もあて
ヤアもよとせいのる愛悟の統とてうんわんもつて
脊中の京カ後んとてえふ本九舞か家か精込し
本をカハ錦せ幅沙と北に彼処の玄園へ
て進来也とあひ半一とと後復あつてとつるに
上お荷をひらびり松柑商人の天秤持て建るひ

とて圓来て舞う引渡ひておまの茶や汝ら秋みひ
とて物もい本をカハ錦せ幅沙と北に彼処の玄園へ
かくことあつておてかろふ喜は舞の園とてあつる
らも注方ありけり不務をせう徳にさうさるぬを
とておらひてあつる然るにまの虚名松の蓋も取
不突もつるもいんや半身黄不深とての奥とて
けきとて信守のあ人あつてまの信守の目も
かきおとびと繁の松とてまの信守の目も

シヤンシヤ。シヤンク。スチヤラカ。チヤンクと天^天神^神川^川を^を押^押す
シヤンシヤ シヤンク スチヤラカ チヤンク 天 神 川 を 押 す
天^天神^神川^川を^を押^押す

天^天神^神川^川を^を押^押す

